俳諧
今七部集

一

へ 5
5613
1

幸舎庵主人編

俳諧 今七部集 全

書肆 正文堂 三松堂 發兌

今七部序

重能句親組あり親組を本とし
ありて能ある家の為にきまりあれ
後のことあらう我すこし后の家親の句親
組あり後の家親しても重能を傳へは
世に俗自然にはあらうとかたしとま
器もた箱丸りの器をあけらへ我ま
如しきる能彩に寄りて方圓のため大

門 へ 5
號 5613
巻 1

小我室にはて監何ほとふかきにかた
様何是みても志ゝのる繁く發句を
いそんハ唯讃唯ふ身か示し先つ俳
諧の字とも書たかく給ふたし扨の所
くふ所居の法則あるまた後の出て
後は是の字にい給へる武ふをし当し調
のはきみを出し紀と諸法もた見越ろ
法是と初学の発業え安かれかし　先古

今の室観身の為に學えた法是ハ
黒葉されき古とかくこのふむ其準縄と
者の繁義俳書の七部元禄の頃のみ
師の今身に業外出る繁実に是と
例がほす子庚年人を与しと所ゐ
如何是も志のり給ひる集我との
探く剰身出えきを一部とえ古し
好む程とかくるえにふみ如え物のふ法を

なほ趣を遠く深くしてさ
まざまにさとりての用ひなば
聖にもいたるべけれ

天保八年九月

葦舎書

序

時に得るにいつの人のこゝろにも深く聲なる流れなるに
世の中にあらはれ出る手に以て天の為に作る所なるを
すゝみし其昔に流れを知るひとを行ひたる鏡
はこのしん自ら語る文章を述べたるところの
寥々たる世の誹諧の編集せる集
のあらはれし事をはなれたるを
以てひたすら是を得たるものゝ名をたどる
あらためて一部となして其事を知る
を見るに変化の四時を言ふ事の
虚実を知りて真の意をもつて人の心の
通ふべき道の有無の実を得るべきなり

是を[illegible]の清[illegible] 文変乃
育[illegible]紀の[illegible]の[illegible]
[illegible]数[illegible]の[illegible]
以て[illegible]人
先哲書[illegible]
を[illegible]変[illegible]
[illegible]
[illegible]一字を加へ今士郎集と[illegible]
[illegible]

天保八丁酉冬十月 香玉菴

広年

宜包

利根考云

近来年[illegible]総の国[illegible]郡江口の里[illegible]庵[illegible]
[illegible]
[illegible]里[illegible]の人[illegible]
[illegible]の[illegible]人[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]江戸[illegible]

かくふたえるなりしに先をあらそひ一まち号して拾ひしくあつむる径に中く
部ゝつの集かすし記録ふりあつふくりゝる拙すへて思ひよらぬ事すれ
角ふくてわさくたへそ恥らしふ先達さるも好之の清宮の清演
達文にて深く好をひらけて新好み見の推着ゆら好めのあるに本の
主とく世あ置くりし好たへてふ此る人の好をしらす哈て吾さらめ
むりしよわ求めなかし今の世ん好み孝をあさへる事あるあとすらさえ一歳を
利根川日記と志るしたるすらしゆ年しくて其の生に未る丁歳にも丁武に
ふ掲此て便ふらして佐京新情日より今も推てと紀ふくくあれハ此編と
て利根在日記と郡して去年此ふ浅三郎作んとそ北の紀
すさひあらとかつハすめ具中在ふるよみて新し
かさねるよれふひをいゆえり中綱し出へるえるありける

大年菊八朶

視聴好眠を推むらいふされいふたいたゆ好事しれ
変遷の頃りふりて家のつとめのあまりをほしをえ山一人閑有
ふ出く人をよするはふり志を企て志らつふさすある我里利根川の
ほとりに日頃ふりあるゆゑ人江戸のたをふ飛ゆいその事とりしも
其う芽舎好窓ふさをなりはのふさるふかん様しゝ清う
あけてくハ花をたつ手抽好のへるのまたふし出へうちゝに此にしさ
るふ友人猫芝のあるしふ此らん郡としてたくりふ文雅にあつる
事のありて在中る八我をとに節好とめ旅とるれんを紀
好のふをなを後さをしまれりてありさり緑有栗橋葉立
人ハ江戸あるや好まりれりとあすもし文ゆかりの子ふれし人志よもしかく
好をなかりゆて好なさる好し梅の里有好にて志くしく子その
蔵思有手しかるらさひを好しく好めて千さき趣ひふさを折哉

[illegible]秋の闇
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]のまするなる
[illegible]たりなる

鳴[illegible] 小園

梢[illegible]塘の[illegible] 丁知

[illegible] 桐雨

日の[illegible]矢より[illegible] 禾木

[illegible]月の船 小蓑

[illegible]秋[illegible] 得普

[illegible]の[illegible] 江閑

秋[illegible]宇て[illegible]塀明を 宜郷

[illegible]の[illegible] 知

[illegible]

影を採りて

[illegible]の[illegible] 桐雨

[illegible] 禾木

[illegible]浦の[illegible] 亀郷

[illegible] 小園

[illegible] 江月

[illegible] 柳蓑

[illegible] 花是女

[illegible] 小蓑

乙鳥も能く馴れたを移りけり　得蕪
手毬の中ゟせなある日はありつ　丁知
移風斎鳥り
すゝき繁し茅屋菫し花葺　藏六
たちとまる雲も地乃嶋たつ　幻芝
板なき樽の裾りを知る茶たせて　茂桂
面やむ美き襟をあらそ撃る　丈羲
きりくと月の出舟能くやまなり　里妹
一声て菜もなき戸の間をかく　丁知
飛ぶる水牛ちくのあれたるき迄　亀山
竹まさすかしたる鐘のまゝし文　嵐擧
同　勝時

青めすゝきの名しや長の日　茂桂
森さく見てすゝる岩のあくるか　丁知
市出しの菓子精めかけ隣くもて　亀山
儀すりかし砂より運び来り寸出
はりかくみへ手ゆらにてもるそ朔り
たもとり汁のかな

勝江　やまと

今雑して妙くなくや雨梅笠　森々
菜かき出ちたちめ梅すゞなく　丁知
日お出るゝ鞍乃あふ未とらうつけて　森
醇買ふたる色月見出しゆふ　出

諱ふる名のせん寺ゆかりしく置　森
庵ふりしく是乃秋やつく　知
むかしは酒をおえ達の滅するを　森
其まゝゆかりけり此寺紫沙　鈞

揮毫

花ちり春かそふ猿まゝちる花見哉　森ゝ
やま鶯のなけりかしこ也夜の雨　丁知
若葉のかる若葉のひらく昔日のちかき　森
自わかるのあらそひやすむ新の寒月　ゝ
其もうの井蓋出来るは清かる風　知
寺の鬼女也まつる見える者寺停　ゝ
此店に香夜案内人弁知らくさし

菊ちたりし和の毛想立は帰り猿乃
首途まちふゝさる生ちよふもの読ひ
よふかるを鳥し脇江寺かな
見る秋の夜揮き新外りかゝりて　丁知
门さ鍵は渦南く家る法る国の月
巣の出乃見ちかふ葛生茂の　得蕪
一都に続の路萬をほけ去りし　知
またかちけ海の方き揺きる　蕪
見はての裁たく成し月の塚　知
蛙ふれ躍乃花かく旅つる姪　蕪
小やしさの象りも知けすく寄そす　知
子乃桃さしすゝる床ふき　蕪

文戯乃ちらへくつけたはのくれて　知
ちやうりよかはゆる冬ねあくしか　蕪
牧家乃稚見かれにおもひかけり　知
とく往うる秋欅の出来る　蕪
ふり口をうつあすむしくよくつかひも　知
まうしと来て姥をまありぬる　蕪
隠居し絶も去年のくゆる皆しろさ　知
あんのり水ぞむ山乃人とふ　蕪
月花斗寝覚ゝ止んた噂きく
祝ふ麻からまくらあくる売僧く
芝うい丘出る斗秋すらふ
家懐ふるゝの業附ゝえて来る描　得董

蛙あかり日かけ淡手の七草栽　、
菜城とゝやふる来くしをむ籠　丁知
去のはや団の砂いけし萱の中　、、
綿子かゝ噂腰ちら桜川迎者　巳東
ことはを嫁しくふゝやたゝその露　花晨女
あちらちの降ぐるう花鳥の春　陶々
何ある飛の光ふる印と世箕の山　知
おもし角人あさ山て中ゆうり々　蕪
菜のふよりたんとあるきぬ木瓜菫　少年 玉ん
てらし往をちなのひぬ撫の実　白起
翁ゝ家の去りしもゝまの若紫うれ　知
ゆりはゝやあくりのひろき丘の寺　清匡

菜形本を得手ぬやうに田うゑ哉　蕪

たうとさひとりこもりて鳴や杜の蝉　知

岡の家や隣ふところ見えかねる　、

てうちんて参らんとするお手うち哉　晨

葉塚の寺さくらなりや桐の花　東

まんまん昔乃さくらなる境乃風　蕪

月の影斜りつゝ夜の夜に秋寂　知

立寂しけしく枯るや秋ほとり　壯之

山鳥の聲かくれて花乃鄙　晨

かはらけ乞ひやし古塚の井の流き　里人

めづらしき日々の降りする水影哉　知

砂すゞや朝ゆふに来ハ刈おとれ　、

あさのたもとをまくる花の露と

すゝ(?)のあるじる送別の筆を手向て

あらたまや中かへる月も捨びて帰り

くらかりてのり来るゝ身のとかく

まぐれかね秋に出はしても出うらゝ

ゆくゆくも人のいふらん月かり　剛　人丈

後を恋して　丁　知

夏まちのうらの旅ゆく秋くる華

わしかさ　猿の　あらき　雪かし　長成

直の古来　姑　枇杷を折りたて　八朶

かゝみに　あやし　夏の　まくら　得蕪

淡積に路わかし　あさき月の露　成

笛のかゑまゝ木板乃実ありて　知
濱傍乃佛龕の際をあつかり　華
御筆の十ま蛸さをするふうかし　栄
手のひらり蘇はらはのふれしかり　知
篝て鞭る中ら子はららふかり出す　成
松たるる声ありたらふく路のすさ　栄
逗留ありのむすゑ引しるる　華
凧気乃ゑかりに集まさ額つき　成
継さへつきけ汁むさ虫とん　知
大船に乗乃近士あのりなり　華
車ろきるに後をたえ彩はる　栄
月の縁ゐ村の人も置つきさ　知

秋の月まるてる気ちる移る畔豆　成
四ツ吊り竹あらしも虎馬夕暮に　栄
あらり窓うちつ下部しの猿立　甚
かりやしく眺るの剣あ讀たてる　成
去ちの水のまちえ指乃ふるくゑ　知
青森さ時鳴乃ゝ岸のとヽまれ物　甚
ふんどし深き気るふきとゑ　栄
今めの松に花霰なゆしのはもりて　出
笛すれは水ゐける人乃かうさぬ　成
柿の家あらゐ意の黒符りあすゑ　栄
御覚さまあ乃遊び余生をし　甚
村ゐ仰より平ゆりかくる西の月　成

雲霧へはてしなくつゝく　知
湿る膝かくて寝りし角の月かり　蓁
足もとになゝめる連合歌　翠
和やかしと折り枕する川風　知
一時ばかりある稲杷の濡みし浜　成
旅籠ありと浮ひし頃を讃して見えし　翠
足すりの稲ふみつける其の仕合　蓁
松の茶の番當坐
鶯野の下へ来れる吉原の月　長成
すゞしさや心ゆるかにはなし海の青　湧蓁
気の隙に膝まくり杜若　花暑女
若布やひけはをかしき尾板さし　お年 すん女

志かし茂うちはなされてさく松の中　丁知
たえなり綿いかれ未にふかく郭しら　八翠
宮す酢くちんて我来もいは乃峰をせ
読ひまおふさしにもつねおしけんは母
おゝれもいて辛ひますゝきの影似
釼ゝす新もれ来わね
ゑすきしとゐ月をさもまた出た家の家気　八翠
ひとふもの峰はらすらさる窓　丁知
積める末は舩のひちて混みちとさて　湧蓁
渉らはふへらすも秋ら織たかれ　翠
ゆの月ふ笛の節のとうかゝり　知
折戸の口に紫苑つゝるへ家　蓁

水に映しては秋のひかりかな　柔
菊見し里おゝてはしる鹿を見て　知
いろ鮮紅に住色も事物つゝて　蕉
むな算用の指を折りめる　柔
素行の鍵もとり出して来あり　知
うわ唇ゆけたる菌のいわれる　蕉
桃をとらへたるわりしもの月　柔
物西行ひの尼女房来りつく　知
風に柔かりつ来るへうすせる猫の尻　蕉
ちらかりのまゝは於き娘没合　柔
蓋ほころり回舎尾も直の寄うり　知
まれらりしとまめ叶餘髪　蕉

浮身掛なれあやふく浮出されれ　柔
末たけくよみし供の条もの　知
若なりの書籍ありに　蕉
かる俳諧の離て来る　柔
川なきに前も来て来の莠し寸　知
山図りの浦して六月　蕉
稀篭も出たる来し中り来の　柔
裏乃浮瀬にふかしすれる　知
若むしる唯蕉の役ふり来り　蕉
日永なり薦の鐸新し洩きする　柔
随年も留るる息のあそつかな　知
あまら上すのけ乃見ぬ梅垣　蕉

もろこしの人来ぬ秋の膳もけふなき　桑
ゆふひたゞよふ里のむらつゆ　知
ちらほらと牡丹も葉も日あたりて　茗
能の手あそびの家蘭もすむ　桑
家賃すかずしも嫁の若狭縫とりて　知
猿ものがたら紙幟　書付　茗
まろうつや行幟式
合歓さくや麻衣を着る人の暮　蕊竟
ある盆の雛あそびのうち五月雨　要五
猿子乃ねむりはさめぬ樒候女　得蕪
松ちりの夜かへ　わらふ蛍子　丁知
け本殺の中も身に秘めて　八桑

ちりくしゃへたる紙戴
咲ありし降あとしかも秋の月　青牛子
けふの寒や東海道にちどりなく　麻交
山吹の出くしと咲く出るる　有月
衣蕊の粥を廻りての秋の味　平出
萩のあらしに降鐘撞たれ　素想
松乃声も返せ山の花あらし　芦窓
門は秋稲のたゞみ影かさな　里竹子
ほつこりと梅咲家の暮る月かな　大布
里人の先へ廻るや鴨乃群　起肇
山家くる木の間よりえて　子規　松拳
車のゆやつほけるも出る山の蛉　清響

月と秋ふくらみ数も定まりけり　芳沅
明かりて寒しお佗人も露ふるる　芳雨
九重や夜の月をうすすり見ん　一正
すなすしく成てそ積りけり面の萩　牧羊
赤とも萩や今年も老し露なちら　桔井
東萱て人味さあるる身の物もし　葉頂
芦のはけ穂ハ際ろ田つくる芋　草扇
枝折や一日休みかかる　竜得
字男飛せも物書くりけり浦ハ秋　一園
稲妻も稲荷の舟の動きあふ　九德
秋風人秋也顔みなる身の有　栗庵
出うかし出船の一事あるる浪　草宝

思ひけん飛しも雲の下り萱つも　玉ノ女居
時しも気来秋あらいしし虫すなし　玉暎女
萬代の須りけ月かる寒の露　章瑞
出るて縄りまきさ月に見ん其　澤鳳
降る音も雨のある雪の秋更る夜　古巖
気むしと寝る気のえ立萩の花　虎和
小枝のうぬ人かくろ花荻の心　少年 和吉
あすうくしと思ひ行うつ奈を月　諫圃
流て出る露手招く一かく夜　拖儀
沖の名の秋ハれて秋る薄うれ　薫畝
とんく出て杉林の気を込る　和什
幸見記秋をあさ出たよりし哉　甚笑

春夜の山ふきこゆる法の声 芝耕
山藤ハ柳のさかりもかゝりけり 光阿
てらしくる朝日に向ふ百合の花 清斎女
うち訪ふ人のたえまや春の暮 菱形女
新年や月前ならも明たまし 述芳
入梅也富士新田かへすもやの花 久好
木の実くりも消て見る紀陽の音 不克
わか鶴の鳴のこゑすしもわかれ 抱節
関東新大樽乃出来や春の月 柳居
水底のたてるうき水鳥の声 惟情
若葉摘は露まで見ゆるく 禾葉
ふしぎ也来ぬ人を待つせる花 六白

香ちる花や音の鶯きこえて山寺きく 紫車
出帰也汲海も置藏の水 松固
星飛ぶや秋の夜る哥萱花 半農
花ちりて月の夜の寒さかな 受月
笠取やさつきの雨にぬれにけり 採芝
摩曲亭入ても山しけき夜の月 小柄
春雨をさくてつれる也蓮の花 安枝
秋さらん葉のすかれし葉の花 里恵女
梅咲人なつかしく見ゆりけり 柳丈女
菊咲ぬむつき花にも秋 因美古
深緑雲の梅手かりてすみ風 芳孫
紫舟秋の夕くれ岸の音さえ 魯商

春雨や近ひにあかて菅しんま　有声
けふも夜やあかり静なる緒手元　蓮佐
本棚の声も四月にあかりけり　柳宇
野のかんさ山のふりさま寄の跡　英丈
家つくり猿きて見やつくし炭　草窓
ほのゑえて麦秋らつ之桜の実　南山
うしとるや何もよらぬ人のまく　瑞皐
かた原をのほりつの房すみ哉　岸芦
里人の石拾かひて来し蝸牛かな　梅丸
坂なつまた隣もおんさね花乃影　青羽
照原は京花あつし辰つき地　鳥白
赤传ふ松のそらちやゝすゝみ　蓮酒

思網の網を結ひ妙秋の風　巨廿
柳葉に蟋蟀なきてさえて扇捨く　丈河
の月にわかれはるく垣根の内　一草
春風や山紙紗ら兆え星あかり　如静女
高ゆる夢の吹きるすゝ舟の柳　比さ尾女
衣紋めさ来てけさ花清水の宮　杉枝
杉の庵椎や家に蚕茶も咲ぬの辺　梅誠
投扇乃く枝もかくや芹の名残　石松
水ぎわくりとふかせ蓮かな影雀の竹　嵐渓
三日月や置きさゆゆく草花く　松堂
新枕花簾ひとしえて月かな花木　荏中
あさかほの出来さるゝ家の本　把酒

冬の日て時雨をさそふ浪の風　怡粟

所ゆかりありて古松の若ゞ事　嘯庵

月をみて涼むも淋し夕かな　芹坡

鏡付は人も嬉しき梅の花　来人

えらみ行や関の川音の蛍哉　吉晃

たなばたや出の雲のかゝりは梅ておし　貞従

冬の朝梅枝の氷乃あけ行かなり　玉桂

夕さりの秋船乃小夜りのさかな　一里

ておもしろ鈴りし宿乃松の草　一徳

蜻蛉や星越町乃夜かゝし　暁河

都の伴やおもり見つ経慢ぞめ　思声

嵯峨の昼かいなやる　会の毛　杉露

栗穂の梢まありかゝす　和張

山家は花も紫藤子あるかすゝむて　菜丈

流るゝ川の人噂ゆゆる新酒哉　若梧

かゝみける花の山まくり飛いあさ　竹露

浮ら葉は嘸也ゆるもみぢ　魯洲

朱の水郡の出にしく郡　儀山

涼しさや陽とゝく朝顔哉　捲水

朝露や陽くたの虫黒く尤　宏左

め秋光りみて夕くまつ秋の空　夏蔭

虫の籠重虫乃開くも　有藤

流れある紫也如きゝ遥かゆり　草玉

只なりくつゝ住の音のゆかなき　桂花女

待ぬ時も里ハもあきの梅かな　癡雲
藪に鳥の声きくる方に蛍ゆく　佳兆
都にハもの子供に撫ふ小菊かな　梅笠
秋の暮すゝしく姫ねまて宿かな　粗文
娘の鬼さひしさの菊のにほひかな　花好
麦の穂に出て来秋つくや子規　止足
三ヶ月の影を吉の宿に戻　金芽
月の後月の橋ゆくけしきかな　翁翠
夜船くる手向の黒きむし花哉　琴甫
市つくる京に遊ぶ花の都　二蝶
桜見ハさうなふもや虫乃声　篤全
年寄くとつかひつく千代の春　仕之

さひしさやかんとゆうにはあくり　樹一
ゆりさうや梅ある池の水すゝき　香月
立ちて来まえやうの来る別れかな　春塘
名月を見とりかけうまちのあかね　閏て
郭の花松原へ出て明月の年寒　清匡
来る秋やかくさんの夕の紅葉　巴東
名の花をあらく粟粥おもふ秋の暮　白記
冬の月湯の井の水にて漬まもりけん　兀峰
手をうてて初秋の月に来る夕　茶静
書うりの声根に来もて待つ月　茗阿
めし月也人くる志ら紀行夕月　憲斎
杜鵑藪子ハ来るとまりにその　千輅

麦の穂のつゞくにゆれる芒かな　斗筵
若竹の葉にハ露へおしかけり　卦童
こゝろよりさし出る窓の名乗る也　李席
咲かけて一際すゞし宵の花菖　羊丈
あんさうを志ほらむ樋をもらしけり　吉良
川水の細うけるや后の月　玉甫
むつかりし歌を見られハ小若葉　北元
山里や祭主の大念佛よし　丈雨
秋の露世ぞ嘗ゐの吉けしかな　道泊
浮風前親を見るに大根引　一揉
明月や去豆汁の古都のこゑ　了輔
刈ともまだ終るや本織かな　對山

雲雀から高き世界や藤の露　鶯笠
松風のたゞしく月はたかさかな　柿窓
月の木々きゝりてゞ秋の蝶　護物
花の雲ゞ見てある椿山路かな　雁敷
秋ゆき夕や桜も河原霞なる　一具
菊なきのもちゝ見られた枯木かな　何丸
文科へ履かひきで打囮かな　碩布
ゆふかけをゆりおとしけり菊の花　登山
はらくと稲荷の柳めくれにけり　大梅
浜ちむる光り咲たる栗の花　一蕙
郁物らんのきるゆく迄かな　鳳
月のさしたる流る清水かな　楚雀

みやこにも隣くされける山の水　志路

咲花と月何事に付しも思ひ入り　貞梅

觸らけて鐘のあら鉢やえらすれと　風呂

春雨につれても迎れも人の噂かな　之威

木瓜のふるきを吹あり誰の志　旬光

春かしと傘持つく咲にけら春　流芝

梅咲りの咲ら室よ見る小野哉　沙路

秋風そら迎謹ち出る梅の若　縁咏

山のみか梅ちちのり隠まじけり　等雄

江の松梅はあられしておちるなり　徐全

折々花の陰にもひるかなて春　白桂

山の手にあるや咲岩あり栗の花　一兆

陰しろの渡まり暮る暮りに春　石皷

懐紙先来た夢也初鶯　丹坡

出てかふしの付ても梅くれ　全曳

春雨をよけて家の柳かな　両㐮

立ちのりてみや松んにまだのふ乙　洞天

葵引るの川にうすら月夜　一峰

夜桜や梅くる栗を買ひけり　楓下

言えばえたろうも咲け梅の花　卓洲

汲みて我が給や是自らに行が空　佛凮

牡丹見るべく苺見るやすさ風　一嘯

桃折るに人しらなくれ袖垣　峯里

うつしけも見えてきよ春の日　百羅

けふつくや窓の赤明の蓮の露　光呂

蔦縛りや名のこ結びし人の紙　花耕

手網得ずに門へもうろむ櫂ちぎ　梅月

隅宅ハ雁ら多し朝茶子の花　雨坊

笹船ものこ來ことば石ちらひ　大年

さりけりや月影の童紅庵の梅　南畝

澄りまで大寺見くる花ゝず　万里

蔦の白得の安しき所の華　湖中

ちらし家と先枝ふ行や并くの穀　四明

末ら居の影りかぞ身苦の井　松保

来まさぬや霧の声の不干散らち　田禾

流れ来て浮葉あり打平ち芙蓉月　鷹白

乙みや露ちり行すゑ甚日和ら　芝蘭

梅の香る人のまかくれ手紙ふれ　石應

移を字めて見きハ凌し丈月和風　窠窗

のきくのうつりかなふ夜　きりぎす　且松

降り筈て蜻の宿かや蝶枯柳　辟車

きのみ鶴のかくて膝むしくれり　素琴

ふふしよきの山の葉の散り等り　岐月

休命の香りそり手もし露の香　雨鈴

漁舟を引あけて見る月夜ふ香　毅丸

松杉の月もうらみて飛く木か本　居兆

寄紅きてむらもらたる紅　魂や消り　普記

めでたハ旅ゆき花の葉むし石　葵池

まつむしや戸をおされて明かゝりし　八木
入かゝる月や荻野に露かくし　甚成
大数に春の美しき菜の花　鬢湖
のどかなる梅さく花の菜のはな　茶彦
蛙なきて菜の花しての菜ひろふ　亀山
水音の浮きあり見乃ゆめけり　蔵六
草むらに撲る降りける霜柱　嵐翠
宵月よ寒風かゝる枯にも　丈蓑
降しきる積真しさりけるの声　梢山
水音や色かしる秋の吹て来る　里秋
ちりかかる紅葉や尾ひかる秋　翠兄
とりはしや家へし枯れの風　蒼桂

ひとり身の夜に隠れしむくけ哉　宜京
菜の花に船よせる野路の今日　松兵
木隠れの奥にひそみて　鳳雛
こゝろよしと見つて飛ぶ秋の鳥　方舟
障子の中よしあし　正如
雨もそしよりた草の縁の　如蓬
静なる此の山の雲に冬ざく　東人
初雪に咲くもの花る都の秋　幻芝
水草の影ある春ならぬ風　栄松
若菜や芝の細かなるに　文子
雲晴の花の露ならむ秋　具餘
晴れしたる秋の夜やかさね　由丸

萩の露しとゝにうつる清水かな　玄碩
さゝかれ木の枝にてふる紅葉哉　柳川
ふるきおもかけ見え門や朝嵐　而好
わか舟やかゝりの舵し本の浮り　東風二
筆とるや手もかけし老花の庵　井水
さくら見る旅あまりまる也相の中　竹丈
鳴出んて鶯きこえし柳も哉　雉姿
あらたなる木枝堂のまひる居るかな　亀石
頃の暮や立て露しく川も和　而遊
ゆく水や日さかりあまし庭の隅　獲川
春雨や二蔵もかれある清さしら　治明
すゝしさや花籠子に水川の月　柳蒸

鶯さへゆりかけつかむ月夜かな　青岐
蝶もやみならしみしゝ春の草　素令
かゝやうと墓の青する夜梅の花　孫山
ちらりと春に眺めかす五月雨　斜道
暮春手のねゝかり咲く花の花　松寿
蛍も口ふりにあり若菜の萩　浦人
蟬あつるや人かれ赤うし舟いつさ　素英
なら見ゆる梅殊あらてる田蓑かな　卑堂
大粒の花こそ黒うかんしより　木架
丸木橋うけ付てある深さかな　菊耶
せまりとも彼七夜暮後の月見哉　霞洞
今買ふて板のゆへさゝへみより　汝永

寒きにもまちかねなき月の出　翫之

のこる縁も高き水櫓　初六

見とる気で隣から出る牡丹哉　二晶

新涼に仕たてたりしん鏡の底られかな　雄鋤

ふらんつんて見ゆるも入る杭り哉　日人

更けるやよるくその影月と宿　蔵推

橋の上やむりたぬさる清水をかせ　北溟

中ソリや佐倉の葉松あらふかけ　西舘

千歳月より振ふさ起おう長くなり　野里

くら銀の枯瓣の欲ともありにけり　完甫

掃除して拭例あるらむかけかな　閑那

守り家の飛来の初音つゆかたに玉あらし　千崖

まつむかしのあらしのつかわれ露の尸　凤や

そくらくのきせ入る猫の鹿に浮かぶ宝の月を　楼堂

おかへまさるうちも気のさきすみれ　開顔

咲折るる宇宙を見よし花の世の春気　萩山

朝来に出す有ぶる苗まな月　蟹守

散うつるかつきも白ならむ春秋の　律翔

たえまやの気になき振へある白ひうめ　青闘

守鳥の飛来也華紙遠来て朝朝の冬　蓬乱

此一折ハ坐の衆へ出座の

すへはのうら定宏遁のまくらり

見出し始るあんこゑりさゝ木まゐ
声のこゑくもり影さへあらはなる娘
餅うるうる形木とりてかまのかもん数　八朶
兜ヶ島へ狩猶の芽をかく　幻芝
義入り出来城明れて日の法して　丁知
柄のかくしこ舞らぬうたゝ稚　朶
紛雪月秋首腐りましし木縁ふ　芝
埜分ゝ中むしこ寄るい峰出居　出
うらあらりの篠笠見きる及戴し　朶
小寛く帰生を抜らんとけり　芝
伸りは日差脉先に打とりしく　出
雪の法らくも雨もうるゝぞまる　朶

あらまし安城敷の荒ますえ絶かけ　芝
よけぬにきてき敷る賀をせる　出
竈に秋の勘定くて出の方のかまかり　朶
矢筒て出して様子おひ付け　芝
妹うれ大軽ひかれぬ山の村　出
月脉をうけて去の東　朶
菊叶し書くるもいわ菜の古　芝
かくに厳寿く床来ゑまる　出
手秋雨乎あへまの器る本縁か所　瓦峰
日和くもり薫さ法しかり　丁知

瀬出しと月も茶台も奏子よりて　八桑
こころしえてやかるん　ひきとらく　峰
渦きや炭にちも見える舟　杭り　知
戸ちゆりも京把擦起きしき　桑
菊り麦り分めるゝ峠見る二ところ　峰
鉄音炎か市への安ぬるひ　知
何かけむ慈悲しらぬて吋はする　桑
つるひの節にさえかへを来るる　峰
鉄門を伊勢詫渡てきり徒ひ　知
半季代りハ漬ひ情のあく　桑
かり気もたんとおつけぬめくしくる　峰
算籠捨てぶらくしと出る　知

妖らとかふも常修乎生れつき　桑
裏家きは慶い月乃浅草　峰
まびわりの振りうきうきは茶臺々　知
草鞋のかえむ表の使先　桑
鼓はぐりたりしるの年ふり
ふりもさるり擲し出くし放え
かいつしるの原絲生居や麦のふし
あさらの床やかゝりも箕蛤鐺のかゆ
慈悲らぬ豆腸つゝみや本のかゆ
枯芦や繋り舟りうえる州の水

幻芝
几峰
丁知
八桑

日記のうちに書ちらしたる
手紙をたゝみ折まゝ　得
蕪
八朔の相識に津さし蕎か鄰
ふりんく椽のはしし寄りて受　白起
大笑ひも忘るゝ代らは月我に　八朶
新ぶの秋は仏湯りあたま華り　蕪
南気に得の小黄も引さけて　几
いはくの華紙真似夕たれ　朶
事多茶納所の窓の明殺し　蕪
戻り新しき忘れ梅豆鉦　几
冬の日も刻々たるこのかゝき逸　朶

太との蒼に藤ふ若り重ね　蕪
とちらくも一つ蛸努地の劉あすり　柿
買ふてたる借くて一つ冬臘蝟　由董
新秋八ぶ子男の老め余て　丁知
むかしも芋を作る月　几
画ら路の梅八若子手押倒し　董
振ふさ寂まりすんまり新ある　舌
京宮の手たりり落し燕の枝　几
掃除をのたし新のふさく紀安　董
引く更手兩戦みくる窮乃警　舌
ナたいた組内も然こすくぶぞ　杜貫
桃折のちかく置をも新　董

やうやくおもひに時を募りつく　乾
江戸へするうちの家の柳さしめ　貫
扇を持手に葉の古きたよりあり　尚
手ふり乃さゝ柳にも負けるふきさ　乾
祝歌印て山吹に宿しさ　哲
をちこち大坊の華見桜出て　貫
ちらんとも糸ろそゞろそゞろぬる　尚
月なかなか朝くつそ志ら紀稲荷稲　哲
はなさきめし鰒ちる縁の住かつき　紅
六つ年の嫁ふあちらに芝居見て　貫
おもしけく書ふ鍋を置く喜きる　尚
網元は稲にかけても釜かけるなり　乾

垂れしゝ手つかふ縁足　哲
芙の笠あふ枕辺へちりぎて　尚
とつかふてりて芦たつ荻萩　貫
由誓
茶ぞよそふ秋風の畑の一葉かな
月すゝ薄子むたちたき　白趣
酒糀味噌つくるも秋もつそて　丁知
傘の中くつきる　れ　哲
夏もきれ法しさ古紀船部合　乾
傍くりきくゝ十藪え如くきる　尚
ちちくふ古乳を縫に糸山集下　哲

見えて吹ほさきちらし泥　杞
瀧しらい折ふし鱶も嶋あらくし　笑
霰ちる竹すゞしき通ひ来の子　哲
塩梅も手つから冬へのうつり　杞
見れ出る物ハ絹ぬく志ろ水紋　笑
名残とて月の後朝の恨しさ　哲
あけれとも母にあふ時の丁　杞
新絹の縫も四五針すゝめりて　笑
参考見まゐらせ時候のへまふ　哲
杖の宿も柚子の玉の朝　杞
指てみ梅子折つゝてまう掛く　笑
笠ねのまゝ常壹の茎めんて　杞

遊君の縁もとしつき芋ましえん　哲
木の間にけ花ねる笠屋をかけてぬ　笑
雨の名なり寺さがりに後会　杞
さかるも氣狩ねかて市穀お櫛　哲
雌加の名けさする後見　笑
庚申に町あり守り番交し　杞
風のめ寄りて良きて句も蓮　哲
楼はてま上くちの古をとも　笑
活惜の宿に毛けかくすら　杞
晴のる枕ふり漕日の気い月　哲
いふつね一と流れ町より給　笑
翁舟の線を分うゝ中り　杞

おそれた蘿蔔に畫い　鈍　殺　楚
大きりあくらゆる雲に墨の跡　岱
あまりたへなり汲んで錫の目　苞
守りえ地の方う銭花のさ毛あり　楚
ほりつく露にありて　鳴　矯　岱
丁　岱
またれ也　揉なり　旦ぬる萎も安り　狂梵
うはらもうえ頃　蓑毛の月　由誓
羊腸に筧の水の　讀　畫を　岱
かくけりて　影へ　移りし　連索　梵
よせ糸もすりらして影し　海の芸

莫は敷　草　花　明らくる　蕣　楚
すく侍甲斐の山ろくもある　榛名　詠　岱
たまれる親中人も　人　我　たしら　姓　梵
観てやめる小袖の紋のかくそれ生て　楚
緋てしむ思ひもいきる　梅　酒　岱
吹ふかる陽あり　国　唄の重ゝあり　梵
ぬすり請負人　韻　絶　高　寺　楚
自書雖静なもまつのさ膝して　岱
子みいくいつ子の西瓜かへる　梵
高ふりうとあさかきりおく段やの席　楚
家儀そのり　四　五　軒の村　岱
手頭の桜に気見よ借かりし　梵

おきつく波に浮かれつき　哲

乱れ起に出石の難も寒げ　賛

ふのしき髪を家に抱て居る　兆

手裁さけて人も見ぬ地頭畑　哲

蓋取りけし枝の清水し吹　賛

焼酒もとじまる鰹の小春めく　兆

二人かかりて座敷掃り出し　哲

肉染て宇佐の妻の背をけ　賛

第縁者は髪もみえ無り　兆

橋けの門くりて流せし庵休み　哲

手揺の声かけも寝付に帰る　賛

風情も世をあかし朝月の露　兆

後すてし押付娘　菖蒲やかまる　哲

形をかな見る奈良のあかし　賛

みんなさきて入乃飛んでくる　兆

まらに出来て手を舟かく　哲

御蔵の揺る帰のかけ時き　賛

笑の中も遠くなり松　兆

香を牡丹の隣にまる　哲

由　哲

花よりもの牡丹の蒼かみ

日の出し照る隠姫先乃都　丁知

活緑の水を蕩らし　哲

抜して見れは 茶を呼ひとり 出
露かける 笠もはや時月の雲 聟
給ふる家へ 加へりは 半[illegible] 出
寺の先の [illegible]寒桜の またた 青く 聟
をはしぬらると 節も わすれ[illegible] 出
出席中身より 業の あらは [illegible] 聟
鉄砲 [illegible] [illegible] 清の 青 出
[illegible]中る [illegible]も あれ に 通り 聟
[illegible]物の 見より から[illegible]する 出
[illegible]の [illegible]紙[illegible]の 之 田 [illegible] 聟
[illegible] 鴨[illegible] [illegible] 小[illegible]子 出
[illegible] 供を [illegible]紀し 聟

[illegible] [illegible] 筆のさより 出
自[illegible] [illegible] [illegible] 茶の[illegible] 聟
[illegible] [illegible] の[illegible] 出
子の [illegible] [illegible] 身拭 今
[illegible] [illegible] 聟
[illegible]冊子八 [illegible]の [illegible]子 [illegible] 出
雲の [illegible] [illegible] 聟
[illegible] 應れと [illegible]の [illegible] 出
[illegible]の [illegible] [illegible] 聟
[illegible]水を [illegible] 引[illegible] 出
[illegible] 橘の [illegible] する 聟
[illegible] [illegible]も [illegible]綱[illegible] 出

まだ秋さましてゝ栗も拾ひけん　哲
嫁が節の○○も同じつくり顔に　出
のぞかせてゆかしかゝる護戸札　哲
ちらし○と冷ゆる雨の落て○て　出
夏衣の○○○を引裂て置む　哲
雲晴てり様子の窓をあけ放し　出
すゞみそゝるは暑る○○く　哲
古き寺も秋入る○○の中の出る　出
嫁る○○○○○○床樋の夜○○　哲
麻○○しく都の○○○○○○枕　丁知

青○魚すし○○○かゝる○○る　由哲
秋枕り○○○○○○○○○○○て　出
○○の桐袖の常○○○○む　哲
○○の○○○○○○月○○　出
○て○○○○○○○蘇○　哲
○○○○○○○○○○○○　出
○○○○○○○○○○○○　哲
○○○○手紙○○○○○引○○○　出
○○○○○○○○○　青　哲
○○○○○○○○○○○○　出
月の面に○○○○水○○　哲
○○の○○○○○一○○○○○　出

具足掛て床の間のあく暇　蕉
ふらくと木履で出る木剣かり　尚
かへしあとの何る生茶の宿　蕉
莫蓙も晴う月の夜の霜あふれ　尚
梵らしさ相子の水手渡るて　蕉
うちかけて鑿をたて稀る草具架　令
隣りやすて葬くら病ひのかまる　尚
杉並の井戸ますみれん之　蕉
菊子え伺ふ稀くる寺つき　尚
川を越さぬ様よ御手の紐を結　蕉
肘うつ古ちきていうつるし　かく　尚
足の垂り肩らきともまかせけし　蕉

筑もつむ皆者先の花久　尚
文字まくらかよう膝ふせの寸月の霜　蕉
襟うき本ちは稲小らむき　尚
行僕名をたよりに隠し素薫品　蕉
古かくれ解れ折くれ来る　尚
折りかし浴て打し出来しより　蕉
鬟も洗ひて後の雪　尚
薪具さきくたち姫新庵の茂りく　蕉
ちらくしと揺る　鏡　青の緒　尚
茶の後く茂せ静嘉屋夕あくひ　蕉
四十一　我是古以紬庵　尚

夜寒の秋の蒼とも咲にけり　　内藤
たるも清水は歎れ候　　　　　翁
まさりに志田の茶雛引てそ　　芭
春摘りは赤秋のあつらへ　　　岱
麻を重く新しく川まうつる月　芭
蛛来て茶有あつめ直之は　　　岱
手紙とめて出を写も老しる篭　嵐
人疑あさきも雛志く入る　　　芭
は鍋りもゆるりと出来る秋気の　岱
志賀一のあさり哉　いそ来ぬつ　嵐

節季の豆腐問候て出来へ筆り　芭
あさしてとどける炭のつきはし　岱
より新井戸も立あ候を酒桶月の照り　嵐
株用意して蒿あ狹かりほし　芭
捷あふく物買出しと古家相　岱
座くのさ先へいそむ巾着　嵐
まつ蒿を米も渡し挨拶めて　芭
瀬戸ほらし干ゆる板し起　岱
出代のすくれ隣つく座し朝酒　芭
秋保えて思てもいふ妹出まつて　嵐
杉 新 乗六あるも渡くるは代なりて　岱
雪隠つくる城要をかり見す　芭

水引をほどいて書ふ鏡かし　埜
霞む折ハあつさ冬何ら哭ゆく　尖
しるくれ陰干ぬ汲の苗附かし　芝
手術の露折北へうすらく　埜
おもし入定陽花同士の裏合せ　尖
様もかくら嫗亀つくいのうへ　芝
書かしてかくちの志まね日の隣　埜
鮮なりゆれてもいやをまる　尖
門前八龍なりおもつくら江　芝
から其おもなり多行く六雲　埜
続ならそらなり見出は振葉　尖
晦日ハ蕎麦の果つ書れある　芝

来りたけとの後なりゑのまかるを　埜
箕山弥稀も会もむ晴らち　尖

採鍛

せむやいかろたうまさ蝶の声　幻芝
古枝弥静なり照るあかし串糸　壮楚
書すろりのま赤くる家跡の風　白祀
弥ちきや郷八木の首のふ雪象　丁尖
花市弥枝や法なり茶り水　由埜

それ志ら糸のこんぜんをは深くとそむるまじく
そもそもちまたもおもひつゝけ記らさりは志るされ初目まる
ゑしおもて志まへみてはなる俳諧千句のむかし
談林をもつてひしく人く独志らしみより松永翁
の俳諧を撰である句との類を集めあそしいその独を
はらしみより人の業抑あるおほし此書をあつめる
ふるとき志らさま撰し集の名は刀根とかぞへ日記し
て後の滋[illegible]をも志られやすらけあさきんとはじめの
またおほし紀業あるそさし先あらし丁生のたるれ
きあるかはらす吉祥な此天保のことのゆゑさありけるに
ならしるはあらざるへし

雷堂麻吏

栗柿集序

ある人柿の核をうゑ置るに蘆ノ宗の子孫にふたたびそれは
松のほとりにうゑきそへ実るにひとしく一人こそ来る陰
あるにあらず生ぬよりかつて顧れ十とせ数おほく花さかぬ
たるとはかし同じくは栗を植まくは也とつくるこころそ
あげて光よ実をも出すふたり盛りあらた松のみ猿の一枝の
陰をおほはつらねしもよめる数もあらるみ遅れぬめによりて余
かつむかし撰集をなし来る人比み寂光身にしたがふ歌
至って此もあり姫撰し一露も志るし詩を折々並べる誌に
あふはらくより[illegible]緑次より集を年おり始さたる発之
又後渡といふくもありて会せるありけれ柿人来て
あくそここちもしと序をそれ其事にいふ入もありしかはしば

あるは季以てきし威え尼と以年よりもあふ絵えん法ハしぬ
別是もとそは道あるんなと説ありても笑ものは尾思ふは
俳諧の道をひらき其事ひとはなして俳者の即異をたて
虚にこれ誰貞寺是より我は此の和を世に道法興をうけ
すゝ世の優をたの和と甚評もかへりて深釈を来むも一所ハ
其那しりあさくそりけそそりあるもえちとさふもいはれちかりと
栴栗の閲蒼を採句のうへまりあそふへも数ちるふ云し
これをみれは此法一くまありて栗栴と号せる撰者の菴
号かりて優園ありて其二樹の趣意をたちもて名付きし
まれあそのかよりよめんあそそえあるは志かりて序とし

隨風　庚年

栗家の宗しえは丈高紀栗の本と栴を本とあり
うり実乃ふ地ありし年ハ家内のなめつゝ泣て
宗旨合ふのこかえ儀の家をよりて栴を食ひ叡丈
をい思ひ来て栗を合ふ振るを落ちて紙指ふらん
是寺なりとあるひとのそれより栗栴庵といひたしめ
たまく甚栗栴の間ふ三畝よたふぬたるけありされハ
小圃くよいへるもありしか伝られはかりのたよりを
ありける紙以てしか小圃栗栴と号名乃かくり云り
あるまちをさるかく帰りそ足らん家の傍らり其年の郷け
たふ季よりて此こんたへけ我もしまあのふさ毎家
一日あふてなり作りて心に芭蕉翁の木像を安置し
これをは小圃草庵と名栗栴菴とはよせなりきされと

まつたのむ椎の木立もあり明ほのゝ絶ぬ俳諧夢語の中に
其の像を置きて手向けしかとねえもすらよしの頃より
深き人の心にしめもと納基菩薩乃一生杖にも植こそも
閑かに入りし守つる栗の木もありてなく隠む桜の
木立あまたあるの時たてわらをそれより飛来ひたる
ふやなしの塚も変風吹なきて白尾仮て雲称の霞乃
子供をもてまゐらせけりしたのしみり筆を

小圃

たそかれて海買ふに二分十日ふれ
戸乃咄たるもの寸探る鬚頭禾　木
むかしを手ぬくう薫を偲しくきらん　圃
あかり系たまきて秋の市の阿と　木

從来あらはたゝむ萬りの手月さしして　圃
股乃ふるくほころびぬさ葉の秋　木
村中て萬しかる幸乃馬　闇
年届いまとりあてる鍛冶宮　木
常よりハ夜のつかくらぬ冬こもり　圃
痛き里鬼神余つり古犬が家　木
雪往口はつのり廓乃咄り数　闇
ひんまうて傘のさしぬ吹降　木
ほうし家なき思ひかけなれ時に打く　圃
松櫃のなれきく　康羅　又出寸　木
夕つしや門来手する楽の祝ひ　圃
古那き頂上　月夜　頂上　木

まつりせて壬生念佛のひゞきあり　圃
表むきから律しく編笠　木
職人の居るうちは足袋錢應　令
さつさしきまゐる室式の制　圃
居風呂の縁に寒まで影出して　木
参り青ねうちはかたまくれなり　圃
夏ともなれ冬に悲しく思ふまゝ　木
役のまへなり塗烟草盆　圃
山谷より手代のたつ世帰る騎　木
風をかなけれは僧乃をや見　圃
恰好も貫目のりかる草つかみ　木
洗ひて桶にかうふけておく　圃

あかしくしたまたり又出る浦の月　木
五六桐咲のいち時り方川　圃
また植そこから是に美花蘭蓄棚　木
卓たのみき少しんた安からり　圃
熱領に生得医者に不調法　木
たゞむしすなはも痩ける夢　圃
此節にけ那一本草紅花乃原　木
越あらさ帰りくるゝ空　圃
夕暮を見るや菜の家ある形かゝり　小圃
山根安りる支すゐ霞の月　桐雨

のけて置洗濯ものゝ皺のして　圃
二枚はしり鉢ならず星　青　両
まよふ草の露ちれば空の月も出し　圃
よ時すぎてあはれさ(辛)様の声　両
味噌あしの雪踏ぬれて分りかける　圃
何も心にきまりて人をのろ　唐　両
いくたびも誰にか告きかへしして　圃
縫衣有りのこる墨　硯乃墨　両
有明なりて月さす書院の窓　圃
大工乃菜ゑ　鯛　買ふなり　両
けふもきてやさしくならぬ秋の日　圃
燈火つける舟乃神棚　両

あたらしい土竈の蓋鉄錆らく記　圃
味身らしうて　浪立の　閑　両
勢りあまつていつも尺まで花盛り　圃
千部ま咽のいつも春のは　両
聯るまはうるそ身を紛いろかしき　令
あまたけ　汲乃今の有ふさま　圃
店身於一間うけまる早帰り　両
濁の陰めぬえ　生涯の枝　圃
西方に百毛銭らぬ　大三十日　両
跳ね多忠　菓於　書　圃
縁つらぬ奏うら恵まく　果　本妻　両
痛　癖　持乃　於乱　切くさき　圃

明月の、ゑ青空にほのかり寄利　両
居七八相　居根を戦す摩り　圃
十分の作らいをきぬ稲乃把　両
萩露へ出る莖紋数ふる　圃
主人より先へ寒のうへ添州の杖　両
旅人へあらく縄さし於鶏　圃
元日は焼しられとも出眠し　両
猫る寒於も待つ郷年　圃
美於来り椿をされぬ執墨身　両
用も椿へわきまへる惜於菜　圃

田うら秋風寄る人へ味を晴り若かりし慕　丁知
香りから於寒をゑ久々す憬障　桐両
人うけし飲るを落らぬ縫蓑哉　千軺
都出乃花乃寄て未かり作り乃秋　一蕙
七夕や鳥来りてあ似寄於西　鶯笠
寒る笑をさりるあらし他の萩　伐年
二日月わくらう川や寄郷芒　よし香
あまり川の青空を解秋海うす　梅宮
月代や夜晩人静の降ちふく　蔦乱
万代のまくらりけれや冬の月　百慈
小坐敷へ月の兎き見竹ぢ秋　古春
涼み於居らすゆふくすゞ寄力哉　呼牛

葎にも花さきにけり庭のはし　雙烏

引ちぎる蝗まつ青く冬近む木槿かな　可大

庭掃て桶の水かけしてあらし哉　荷歩

今朝の時雨やよけり花見て蓬か　貨僕

小菊さく木曾の吹おろし秋の風　敬斎

稲扱のあとさき妻の有ほとに郷　雪簫

山門に朝顔や通り菰　西堂

釣船乃苫ぬれて来にけり　春騏

折さして隣の垣根秋のうち　素伯

一橋の橋に蜜つけて帰る哉　禾葉

菊賣て折りへを九月十日かな　鹿太

残菊や寄しかへしの隣にも　茅丸

荻笛やこゝろ浮かしても秋の声　可布

りん秋を忘して飛や鶺鴒　暁洞

来て仰し古城の晴し見えて　斗遊

てふへのやす十夜晴れて秋の水　之誠

刈取乃来るや暮て枯尾花　鼎左

枯て残る里の家みのつましき扇の花　四明

水仙に笠かけてある夜舟の柳　一夢

蔵米のやまいありやすいきん花　女　多代

穐後ろ赤飯たくやかる鳥　麻呑

捲ふれたせなかもし冬こもり　阜湖

初冬のさりと寺百姓や冬かよへ　樵ゝ

門川や[illegible]桶の瓦　黙巣

[illegible]一日風や[illegible]　小柯

[illegible]の[illegible]梢[illegible]あげる小鴨[illegible]　徐全

[illegible]笛の上　大梅

[illegible]門　正月

[illegible]や年[illegible]　三蔦

[illegible]夜[illegible]　五蘇

[illegible]　赤芽

[illegible]　流芝

[illegible]年[illegible]　可門

[illegible]　楓下

[illegible]の内　江月

[illegible]の[illegible]　素仄

[illegible]國[illegible]　露谷

[illegible]那　碎嶺

[illegible]の先　凤也

[illegible]や[illegible]　叢[illegible]

[illegible]や[illegible]　茂椎

[illegible]や[illegible]の[illegible]　沙路

[illegible]水[illegible]乃[illegible]　亀得

[illegible]　八朶

[illegible]の[illegible]　蘭好

[illegible]や[illegible]　蓁里

字呉飛ぶ秋の道すがら薮傳ひ　夢蝶
青柳しや舟つく上に茶俵　在る虹
よみ捨し月すゞしさ淀の陸路　抱儀
相宿の客に又逢ふ桜哉　斜邑
ちりしきし蛙の声や柳かな　月海
活舟へ一日たゆたふ卯月かな　孤茶
植うけし草なや井戸より蝸牛　烏岸
婦人こゝろの虎出すや柳かな　碩小
桜見ていゝそふ白な添へり　里竹
ちる時はいろいろつゝく桜かな　青可
滞ることは薪あかるき桂かな　月庭
舟ちんを経冊をとめてゆくかな　凉谷

岸麦の春雨杖つくや梅のうら　護物
都花なりき花よりあかね二月かな　椿年
けふ出きて東へ不出の路の鶯の子　塞馬
京や人の夜毎あかける桜かな　渓斎
峰かより花遠き雲雀哉　史子
らくらくと草の芽ゆえ浮蛙　南濤
伸る鳥の気分にほたる蛙の郷　阜郎
鹿うちて鼻に先きより峰の陸　栽亭
一声寺りや雨の緑にけぶりし　得蕪
夜半かまでむしれ引まくる桜かな　古翠
同じ花ならんとする下る川　古翠
桜下さく猿あちさる鐘かな　秀朴

鶏の啼は築にあかる夜ら哉　梅裡
貝皿や木賃宿のさしみ汁　華齢
勝のりし肩あらたむるや道路かな　卦竜
畠から日和を見るや遠寺かな　蓬画
梅ひらく月日をかさねて飛蕊　かもうさ
柳あをて梅ひ草臥真ア年暮　杏白
家めぐるちらちら水や春の月　杜雲
人の麾を聞くや小部屋のほとり　惟阜
山中を元中に消ゆるや姑のほとり　葉谷
菜の花や高尾をたてる籠屋の田　袪白
長さり新人に見せるや山の艇　一肖
雛の猫とらへ去る夜哉　東一

傘かかる吉己をふれ華の月　芦見
花咲くは白々しけや寺の犬　彼文
山路や主さ中の春さき尖尻　三枝
流水は夜もすがら春の中に　不及
篠えぬ野に来たり更衣　福禾
卒病の床に口の吹くや雲雀哉　自楽
子鶴深山へ帰りて又来る　者吾
古池へ梅の青葉やはらはらと　平出
宮の中は月のすすり出る燭哉　有周
砂白しこ人をうがつかくれなり　墨菓
朝々記一夕草の舟　錢兄

傍みんくもりのいまはるかな　而后
天井より西日のうつくし若葉かな　葛孫
拾ひより海苔屑きるや若葉かけ　松什
御誂をうけ若葉より柿の花　春渓
若松子たしろ葉夕日守けふかな　松山
川越て瀬子の遠山咲り可那　晡連
一ゝりて逃る杜乃声きゝけり　子行
杉のうちより出て買ふる松魚かな　之桂
傘かりし上り黄昏のかきつばた　東平
杜若見るにおくれや藤の花　槐々
垣根より散りし出すや百合の花　大素
隠れしてふくるゝや茄子畑　可一

須細やわれそよぐ茄子の花　峨
昔能き自生のさかり哉　篠山
人足乃多き中より昔能かな　白兎
酔ぬ日も数漸し文蔵匹の番　竜
五配の掃除ほとりや瓜の花　石鼓
ちかまきし峰つまり都の月　文洲
材木を買見ゆもかな　守中
酒のみ日の日かけや家の笹　幻芝
誘ひそて来たる毛虫哉　春翁
過審ひさんて蝉の啼けり　白桂
ましい水の流れ追ふ蝶の夢　松濤
こ緑さしけて竪川流れや五月闇　宣竹

あふれ来て袖口ぬらす清水かな　比古

山寺の日影をしらぬ清水かな　一具

金銀して立かゝるかけろふの姿　林曹

ましら行や呉服所の障子　春路

酒うる前に謙てかゝるみちの雲　斗園

樽杉箕に鱠をさすや涼台　小篁

風かゝるあさかほや蓮の花の露の中　菊所

筆硯芝生の影に佛かゝる筆の　一楼

川狩に出て帰るゝ袴の金のふち　大巣

川狩や息をひそむ工乃十ヶ一　荷了

神鞍新酒利く男かな　英山

酒盛の高声出ける鐘か霜　小圃

夕月寒き立よる菊の茶　桐雨

落雁の声残る花をみまさる　梅室

咲きし降るこの頃猶来る　圃

早苗かゝる梅のあかさき旅の月　雨

何と明る棹の残る　夕の秋　室

鹿鳴きを茶さきしみける袂の姿　圃

血の出る夜　踊ある川　雨

針立つ乃手引きあけてもの音に　室

汲むや家　合が肴　川の音　圃

封じ衆に御家の中をも名合咲き　雨

木具も木挽ときこゆ一つれ　宮

ことしの月何ゆあつきまゝり　圃

何ら求りもちてく廻る名の文入り　雨

稗飯かいや茶けのまゝ出かけりて　宮

行かゝる情やつかする勝星　圃

先の古い耕作業我まゐりて行　雨

すゝみか我ふへい嗜く形勢法若　宮

大名に備あたまりの客やとまり　圃

岸根乃猥りたまく面偏　雨

鼻かき川気色いそつ衣と後　宮

牡丹まつまこと顔か抑くれく　雨

もとの社の出かり菜種の秋　圃

須まの甲へ入りけりほとゝきす　宮

谷陰の春の花咲たく稲上り　雨

厨のこさせん蝶しも先争う　圃

曲縁我秋の障り草古路つまもとて　宮

木の面もあちこち菊乃たまたまる　雨

帰るもりかまもるもの月赤し　圃

頭さあり乃人々一ふ季　宮

財わきく様う森て海鼻さ　雨

網合せわた糸糸乃引出し　圃

冬の日のはしら磨り法し出て　宮

たゝ以里話まあんさ鏡妻　雨

菜さかり髪剃藤もあらり気　圃

ゆかしさや庵乃すゝき穂さへなし　室
桐雨
素の代せ神事月は神乃旅　梅室
あけぼのゝ森の下草
梓梁のまねくうちに羽織着て　小園
鬼灯あはれ人形出来く　雨
月は舟艫に乗先に吉兆系　室
時雨ゝまゝり渡る鳥も引きかけき　園
眼をふさぎ生死の聲古く寒く　雨
婦くにあれは以川も身寄る隣　室
楳葉の盡は入逃の拾参す　園

梅さく茶の花てゐる見す見すし　雨
有明けぬ且くる夜の梅柳君　室
かたまりしとあまるうす鍋　園
紙はつくり逢ふ禁えて汁さめて　雨
宵の樂かつく帯　綿　る　室
あそひめのとんも宵も生きし身　園
莘もうたふ昆ちゝ大殿　雨
日陰紙に聴く杼のかふみあそび　室
硯の表紙たゝみ出す青　園
ひやかに汗をあまし室の恋　雨
清盆の酒のまゝ引うる髪　室
葬式にて細ちの火に消る　園

舟宿の紙はしたり 常かうく 宮
暁の鉦はしてたる物ぐさひ 两
付うらみ紙辞する見えぬ年たふ 圃
雨やおこりいつの年もあやぬくし 宮
夜雜來海を 雁の 水うつ 两
ふきさしや 傳えれ方力為紀 圃
嵐待ちたる 出立 まつ発ちし愛 宮
旅出の脚の見えつ作月細し 两
真宗木乃 ゆきたる 朝宮 圃
一葉の亀 置きたて秋来て 宮
すわりし梅は あきたる 使し 飯 两
信濃すぎ 借老く扇子合せて海 圃

旅のねくら紀 貝かれ くらし 都 室
出る居も何緒て知りしと 花の比 两
是非 飛入 のこる 赤い 岩 圃
竹の青天 葉を節は けさの雲 梅室
冬は 宮古 うりる妓あふる 垣 小圃
みやさやを稲人の肩 おそくて 桐两
ぶつり 付きて 飯を立つ 室
おとこのり紙 天気してしまう月 圃
満月をとめる青 むし飛 两
襟首や 紫の たち弄る 秋紙 室

侘つゝかくすり饑く　廣亭の　園
紅梅咲て虚らんふ程のこんたて　両
町をたちまちて燈吐く　さぬく　室
耳ぞそらり燦の明まま　草ふかり　園
一夜わする孫道乃　背　出けり　両
孫の菜穀　青の林を尺由る田　室
甘手つゝまけ　獺　手能　柵　園
蝶鵆をうつり蹄て乏へまする　両
韓う鳥紙　あまらう魚せふまし　室
而出ぬりむくのふ　棲郷の　花早支　園
麻薦こんで　何心を圏手れ　両
象ぐ能　画夢て帰る　童生会佛　室

うち水　売てむ　鍬　を孫　出る　園
白叢の筆ず入るを漆ふける　両
園の障子手くりりゝ　裸　身　園
いかめしく見たるの小刺まちて青　室
蝉酒つまて伽鮮ぬ　猪　両
かふ事よけるまへうち天窓らん　園
妙意ひうみの方くらり　あ款　室
称ふ案て快筆能良秋うちまさゝ　両
うち枝まちふ行まぬんて能朱　園
今組ぐ居能ふ障らぬ否ふ出く月　室
半能飛らり　稲　業のうけ　両
端鞍能背ふ投く運ふそらみて　園

気たえたる茶の煙る腰かけ　室

かうり追くゝ咲たけぬるほとゝきす　西

皆あかさし帰るまて晩鐘　圃

たゝみ替えき人をよふめる門の柩　室

なめん綿の襟ぬるかまくらへ　西

八

帰り妻ましらて伸さまかりぬ　桑

関るへ　あきのよる　野る　小圃

絵鏡くりて櫻かけあまふる待し　禾木

しきぬ　ありて気をかけうしあり　丁然

草わしるかし棟かかり朝の月　圃

はつかいのよめり庭亭子をく　桑

此秋も是まく七十あまりまりて　知

直してくるまてく名鉄ゆくくく　木

山さと乃くるまり法師鳴のとふもちられ　桑

妹聟の洗生子火飛ゆる　圃

こもかけ伊勢屋の二階とりちらし　木

無紙花のころもかりて楽る　知

赤きかみの笛ゆり出てあまる丹織　圃

痛くさ廿葉紙麦くりきらすふ　桑

けふもえ蜜饅中をもかくつきて　知

わくの糸くちかくするる甘藷　木

和紙菓のみをてもへく暖通り　桑

達者な男 家弟ら殺すなる　圃
一年の諸色算盤にまとつみ　木
内にすゞしく川に花めあひ　知
常ふる手ぬぐひ窓のきれかかり　圃
日光膳ハ六部あしらひ　采
気に喜び明日あつる露番　知
納戸のふすまを押る三味もん　木
時に緑の棒のあまり一筆も　采
おもめりつゝく冬の向そ加　圃
銭舟の道入ると沙汰もなりけり　木
用なき人を関所しりまする　知
秋の隠すなきも月の光するそ　圃

待はわづかに若枕をまる　采
温泉の梅も秋にさかりかけたり　知
きよう鞍置て行れ 鷲　木
采
圃
木
知

丁　知
引提て山ろや大枕の名もまきまり
赤や帆しく進ならる　冬　采木
無縫さいり見られの子泉こみそ　八采

ちらさきはらふ也かりなる　帋　小圃
自すへり跡をす通る　爽代荻　木
秀の先へ来り置　きく　たき　知
時外結　捧けり　糊中　がらゐる　圃
つめらひよ来る　菊　ころ紅　栞
おくる蛾こらま篝の　たらつゐて　知
仕色　納豆乃　ら出日けそり　木
安石くへり　鶴くへるも芋茎　栞
ちりらへ蛤　炉中　らいかり　圃
一筋の鍬　提つける　月　乃　跡　木
蛙　宰　服の　茄つらりも　まつる　知
蛙ちらりハらせへ道　ひそうら露さき　圃

もりかく急ハおつ口　秋　栞
きあすきハ雲時せりつも遠しあり　知
萩時せり浮りけ　豆　転　文たく　木
まちて鶏さ　篝　虫席も来あきて　栞
備のはくり秋に　重　乃　湖　圃
いち時けり　嘆のそらしたる　扇　まり　木
村外菊驚い留守かちらけり　ある　知
第理らくる内方つ色の通りかけ　栞
枇杷のはちつきて紬乃ゑをこつく　圃
馬の旗二疋め時帝よかゑりけり　知
西そ　東を　むけ独　吹　簾　木
おりかすそ書ちんの編そそうり　栞

積銭をもて接ふ免し　粒
内庭の月ハ九日結ぬらし
あからくハ中まさ秋　さく桃乃実ぬ
露もりすけらまかるき　角力取
團　木　知　園　桑　知　本　桑　園
如意り算大根引銭帯ぬ女銀陸奥富禄ものの白
走気しし附　あるり以そおそり為生の食ぬ意かなし

うえかくみすけふるとさくみさみ銭はるかなり　きぬてもて
足利生まれる其の庭より八架老人中を出てうちもふし
十年あまりにいるり秋まりて天保二年閏十一月十七日
未だ老人の歳ふるり　閉らまりまうちり　よお叔ひとり
生れて数字ならふすのへ味ひさへまさりなり　法生寺
帰り算の巻ハ四百大根引の年紀ハ五百足らされと
此木八架老人なま乃あこりの俳諧を案して　其まま
秀材家に写りて今条の末に書つく

幸舎庵主人編

俳諧今七部集 全

書肆
正文堂
三松堂 發兌

ミ[redacted]
マ第一